

吉田 裕編『戦後改革と逆コース』

青山 文久

この書物を詳細な論述内容に即して書評することは、この時期について専門的な研究を一切したことのない私には全く無理である。だから、以下に書きつらねることは極めて恣意的な感想にすぎないということをお断りしておきたい。そんな勝手な御託なぞ聞きたくないという方もおられようが、本シリーズが一般読書人をも対象とした啓蒙書の側面を有する（つまり、純然たる学術専門書ではない）ということをお考えするとき、一門外漢による妄言も許されるのではないかと思料し、ここに一文を草する次第である。

本シリーズの編集方針に従い、本書の冒頭の章は当該時代を通観する概説になっている。執筆者は吉田裕。限られた紙幅のなかでは比較的良好に書けているのではないかと思える。しかし、いかんせんその後が続く各論部分の諸論稿には失望させられるほかはない。どうして、こういうテーマで執筆させたのか、編者なりの意図はあるのだろうか、これらの論稿に目を通してもしつこうに時代像が浮かんでこないのである。そこで、本稿はもっぱら吉田論文をとりあげて論評をくわえることにし、他の論文についてはごく簡単に触れるだけにしたい。

吉田の概説を読みながら感じたことは、アメリカによる日本国家改造の凄まじさであり、ここで作られた日米関係の原型が今に至るまで維持されているということである。いわゆる日米経済摩擦以後の、バブル経済とその崩壊、日本経済の構造改革とくる流れがアメリカの意向にも沿ったものであることはだれの目にも明らかであるが、なぜ日本はアメリカに逆らえないのかということをお考えするとき、アメリカの占領政策の刻印と、それに対する逆コースの無力さに行き着かざるをえない。なぜ「逆コース」はその目指すところを実現

できなかったのか。国家の本質は「統治」、すなわち「軍事」と「外交」にある。日本国憲法とセットになった日米安全保障条約はこの「統治」の実権をアメリカに委譲するものであった。国家統治をめざすまともな政治家ならこの憲法の改正と日米安保条約の全面的改正（対米従属からの脱却）をはかろうとするのが当然である。しかし、この路線は失敗に終わった。

なぜ、逆コースは目標点に到達できなかったのか。そういう観点から吉田の概説をみていこう。まず、一般国民にとって、アメリカの指示による三大改革（財閥解体・労働改革・農地改革）とそれを受け継いだ経済政策・社会政策の方が支持できるものであったこと。したがって、経済・社会面での逆コースは貫徹されなかった。次に米ソ冷戦開始という状況下、国民の多数にとつて安全保障と外交をアメリカにゆだねることのデメリット認識よりも、憲法改正Ⅱ再軍備強化という路線への「反戦・反軍感情」にもとづく忌避感の方が強かったということである。結局のところ、戦争に負けて自国を占領されるという、世界史上の大部分の国家が何十回、何百回となく経験したことをただの一度も経験しなかった日本という国の世界的特殊性が、およそ軍事というものに対する日本国民の異常なまでの忌避感を生み出したといえるであろう。これは世界的珍事であり、世界的異常事である。ここに問題の本質がある。つまり、軍事・外交と全面的に向き合えない国民とそれに追隨する政治家の再生産が戦後一貫してなされてきたのである。もうひとつは、これは吉田ははつきりとは書いていないが、アメリカがいわゆる逆コースを望んではいなかったということである。アメリカにとつて日本は従属したままであることが望ましいからである。

日本国憲法の「戦争放棄条項」は、日本政府の自立的な「統治」（軍事・外交）を不可能にしている。吉田は日米安保条約に対しては批判的な言辞を弄しているが、自国の軍事的主体性確保を可能にする憲法改正なくして、日米安保条約体制からの離脱は有りえないということを知るべきである。吉田のよくまとまった概説を読みながら、

日本人はいまだアメリカのつくった「戦後」から離脱できないでいるということを感じた。

吉田の総論に続く各論について一々コメントすることはしない。私としては、もつと統治階級、経済的支配階級の視点からの論稿を読みたかったということだけをいいたい。なぜなら、「上からの」視角からこそが、当該時代の全体像把握を可能にすると思うからである。被支配層から歴史を描くことも必要であるが、どうしてもそれは狭隘で部分的なものにとどまってしまう。国家こそが社会を総括するのであるから、国家の統治階級から見た歴史こそが、時代の統一の実像把握の前提である。それをふまえてこそ、そこからはみ出した部分も含めての奥深い歴史認識が可能になると考えるべきである。